

デカルコマニー

でかるこまにー

造形ファイル <http://zokeifile.musabi.ac.jp/>



概要

デカルコマニー (décalcomanie : 仏) は、紙と紙などの間に絵具を挟み込み、その上から圧力をかけることで、絵具は押しつぶされて広がり、作者の意図しない偶発的な形態を得ることができる技法です。フランス語の「décalquer (転写する)」に由来します。

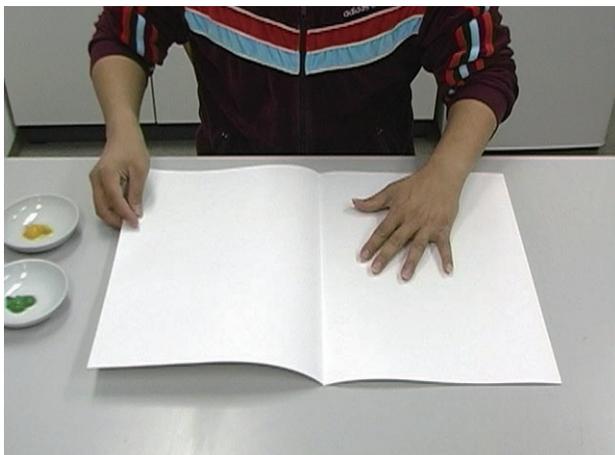
紙を用いたデカルコマニーには、2つ折りした紙の間に絵具を挟み、再び開く方法や、アクリル板や紙面上に絵具をのせ、その上から別の紙を押し当てるなどの方法があります。紙を2つ折りにする方法によりできあがる形態は、折り線を中心に左右対称になります。デカルコマニーでは、使用する紙や絵具などの素材特性が大きく表現効果に関わります。紙には、表面の平滑性や吸収性などが異なった様々な種類のものがあり、それぞれ特徴のある転写効果を生みますが、基本的には、水分が染み込みにくく、表面が比較的滑らかなケント紙やアート紙などが適しています。絵具は、水彩絵具やアクリル絵具などの水性絵具が適しています。チューブから直接出したような粘度のある絵具を用いると、デカルコマニー独特の皺やまだらな模様ができやすくなり、また、水などの混合具合でも様々な表情を得ることができます。紙を押し当てる際は、バレンや手の平で圧力を加えていきますが、この時の力のいれ具合や方法により、絵具の形状なども変化します。また、紙を剥がす際は、ゆっくりと徐々に剥がしましょう。ちなみに、キャンバス上に油絵具をのせ、アクリル板などを押し当てて剥がすことで、デカルコマニーの表現効果を作ることができます。

元々は紙に描いた絵を、陶器やガラスに転写し絵付けするための技法でしたが、画家のオスカー・ドミンゲスがこの技法を絵画作品に取り入れました。デカルコマニーによるイメージは、制作者のコントロールや意識に関係なく偶然性にゆだねられます。その偶然や無意識により現れたイメージは、見る者の想像力を拡大させる効果があるとし、シュールリアリストの画家達の間には、フロッタージュなどと共に、オートマティスムの一つの手法として広まりました。特に、マックス・エルンストによる作品は有名です。

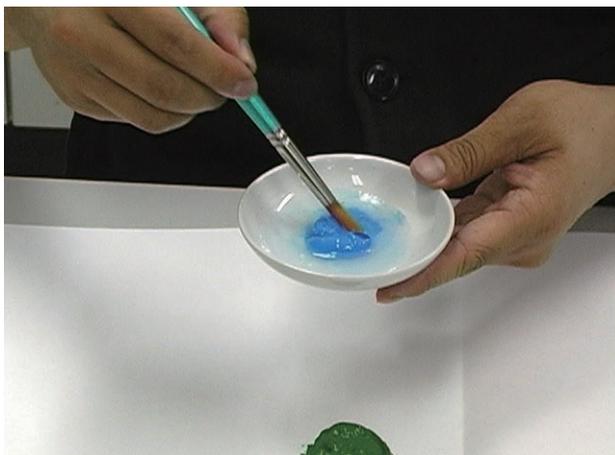
作業上の注意として、デカルコマニーは絵具が固化する

前に行なう必要がありますので、アクリル絵具など乾きの早い絵具を用いる際は、手早く作業を進めましょう。

デカルコマニーのつくり方



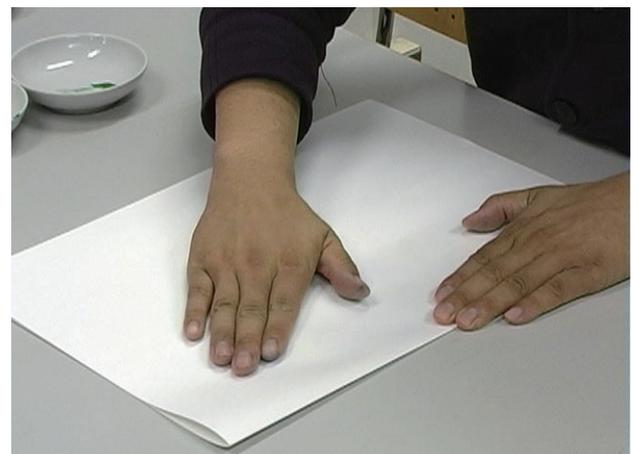
手順1. ケント紙やアート紙などの表面の滑らかな紙を用意し、紙面の真ん中に折り目を付けます。



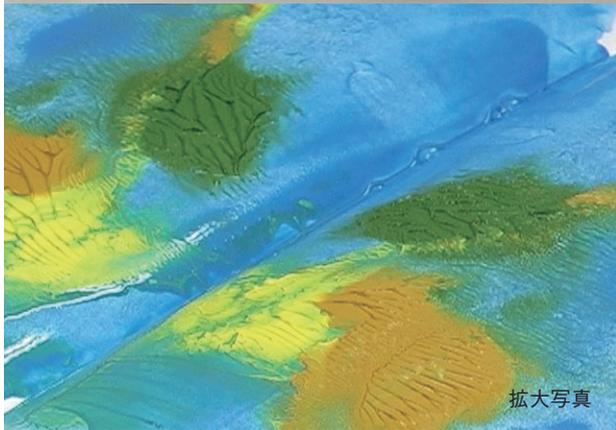
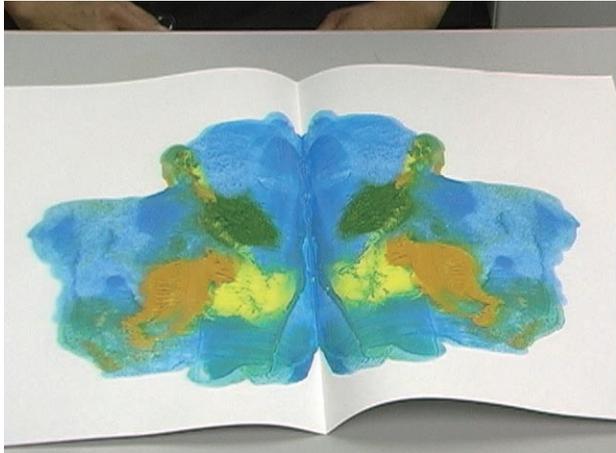
手順2. 絵具はあらかじめ絵皿などに出しておきます。水との溶き加減を調整することで、伸び方や表現効果が変わります。



手順3. 折った紙面の左右どちらか一方に、絵具をのせます。



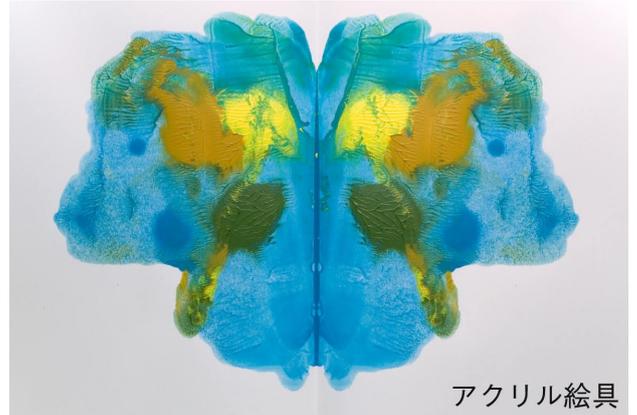
手順4. 絵具が乾かないうちに真ん中の折り目から畳み、紙全体をまんべんなく押しつけます。



拡大写真

手順5. 再びゆっくりと開くと、左右対称の不定形な形態ができあがります。

制作例（支持体：ケント紙）



アクリル絵具



透明水彩絵具



墨汁